

素人小説

第6回「某社長の交友」



株式会社 BSO

1 第6回「某社長の交友」

- ・ 大学時代からの友人たち
- ・ 就職時代
- ・ 郷里に帰って
- ・ 異業種交流会の設立の話
- ・ 準備会に出て
- ・ 色々な人への誘い
- ・ 富田の事業失敗
- ・ 事業がうまくいっているときだけが友達か
- ・ 異業種交流会への想い

大学時代からの友人たち

岡田浩一は、親父の承諾の上、大学を出てから3年間は自分で見つけた会社に就職した。その後、親父の会社に帰ってきた。

彼は、特にこれと言って個性的でもなく、また人付き合いが良い方でもなかったが、それでも、大学時代からの友達が数人はいる。その一人の福田孝は、家庭の事情で出身地の佐賀に戻り、県庁勤めをしている。富岡剛は、某大企業の事業部長などを歴任し最近は東京本社にいる。この二人とは、1、2年に1回程度会うことにしていた。集まるのは大学時代から大概、飲み屋である。毎回、話の内容はこれと言っていないのだが、会うことに意義があると言った感じであった。

就職時代

就職時代には残念ながら友達らしい友達は出来なかった。また作ろうという気持ちにもなれなかった。とにかく、仕事が忙しいと言うこともあったが、親父の会社に入ったら出来ない、社会人としての生活習慣に早く慣れることばかりを考えていた。

郷里に帰って

親父の会社に岡田が帰ってきた時、親父の会社は、地方では一目置かれる社員30人ほどの規模のものであった。

帰ると同時に、何も分からないうちにJ.C.に加入させられた。J.C.には幼なじみがちらほらいたが、ほとんどは名前を聞いたことがある程度で初対面の人が多く、全く知らない人もいた。

その中で、3才年上の笹島信夫とは飲みに行ったりゴルフをしたりしているうちに、大学の先輩とすることもあって懇意になった。笹島信夫は、この地方で古くから広く事業を営んでいる笹島一族の本家の長男であり、その当時は父の会社の経営企画室長という肩書きであった。

笹島は、遊びだけでなく勉強会にもよく誘ってくれた。そのような中で知り合いになったのは富田孝造であった。富田は当時33才で、元は地元に出先機関のある大企業に勤めていたのだが、高卒であったので、このまま勤めていても埒が明かないと早々に見切りをつけ事業を興した青年実業家である。知り合いになった時は20人弱の社員を擁する企業であったが、飛ぶ鳥を落とす勢いで、頼もしく、また羨ましく感じさせる人間であった。

異業種交流会の設立の話

親父の会社に入って10年経った頃、親父は岡田を常務にしてくれた。今まで実務責任者としてやってきたのだが、会社全般を見るようにと言われたものの、会社全般は今まで通り相変わらず親父が社長としてみているし、今までの部門は社員の藤井が見ることになり、自分の役割がもう一つはつきりしないまま半年が過ぎようとしていた。

そんな時、笹島から「商工会議所が県外視察のメンバーを募集しているが一緒に行かないか」と電話があり、別に時間がないわけではなかったので参加することにした。一泊二日の視察旅行はこれと言ってたいしたことなかったが、帰りの列車の中でたままた隣に座った豊島郁夫から、いま地元で異業種交流会をつくる話を進めているのだが、協力してくれないかとの誘いを受けた。豊島は、彼の父の死後、後を継いでいる。彼の時代になってから事業を伸ばし、経営者として高い評価を受けている豊島とはそれまでに懇意にすることもなかった。

同田は突然の話にびっくりしたものの、「経営者たる者は、あらゆる機会を逃すべきではない」を実践している豊島に感心したこと、豊島がわざわざ隣に座ったのもこの話をせんがためのことだったのかと思ったこと、経営者はかくあるべきと考えさせられたことから、この話に乗ってみようと思った。

準備会に出て

岡田は、翌日豊島から電話を貰い、交流会の準備会に出席した。馬場義男、永井進がいた。馬場も永井も二代目経営者である。年齢的には、永井、豊島、馬場、そして岡田の順になるが、豊島は年齢に関係なく中心的に行動していた。

豊島達は、20人ほどの会にすべく既にメンバー候補のリストを作っていた。その中に自分の名前が入っていたのを見て岡田は苦笑せずいられなかった。そして岡田はリストの中に異様なものを見た。名前の前に「x」の付いたものがないくつかあったのだ。

笹島と富田の名前に「x」がついているのを見て、ちよつとためらいながら、岡田はこのことを豊島に尋ねた。豊島は気楽に次のように答えてくれた。

笹島の場合は、「他の会合に参加しており、また、この会のメンバー候補になっている人達には結構顔見知りが多いので遠慮したい。その代わりというわけではないが岡田浩一を推薦する。」と言うことだった。富田孝造の場合は、二世三世といった後継経営者ばかりの中で創業者が参加するメリットデメリットについて3人で色々検討したのだが、やはり後継経営者のみで当分様子を見ようとい

うことになったと話してくれた。

単純にメンバーを集めて会をつくるだけではないことを知り、感心させられるとともに、岡田もこの会を大切にしようと言う気持ちを持つようになった。

色々な人への誘い

岡田は、準備会を見たメンバー候補のリストのなかで自分がよく知っている人がいかに少ないかを改めて感じていた。また、このリスト以外にどれほどの知人がいるかということも考えてみた。そして、如何に自分の交友関係が貧弱であるかをも思い知らされることになった。

岡田は、自分が分担して交流会への参加を勧誘することになった5名についても、ほとんど面識がなかったことに気が付いた。これらの人々に会いたい旨の連絡を取ったところ、皆怪訝な様子であった。しかし、とにかく、会って勧誘することがいま自分に課せられた重要課題とばかりに行動することにした。

岡田はいままでに自分が経験したことがない程、この勧誘に一生懸命になっていた。話をしながら自分が変わっていくのを痛感した。皆、話を聞いてくれ、5

人全員が参加することを快諾してくれた。人を動かすには、どのようにしたらよいか、が少しづつ分かってきた。

全社を見るように親父から言われても、社員は誰も自分に関心を持たないと思っただし、また動かせる自信もなかったが、この「交流会へのお誘い」の経験は、彼に経営者として必要な「人や集団を動かす」ことへの自信を持つキツカケとなった。

富田の事業失敗

エレクトロニクス機器の製造販売を中心に50名の社員を抱える規模にまで発展していた富田の事業は、5,000坪程の工場用地を購入し更なる飛躍を目指していた。

富田の友人たちとともに岡田も彼の事業の発展を羨ましく思いながら惜しみなく応援した。このような友達関係を岡田は素晴らしいものと感じ、また誇りにすら思っていた。

ところがあの事件はあまりにも短時間に押し寄せてきた。バブルの崩壊で、富

田の会社の取引先大企業は事業を縮小した。富田があれほど自慢し誇りにしていた大企業との取引、大企業を中心に販売していたエレクトロニクス機器が突然売れなくなったのだ。3〜4ヶ月の間に販売高は半分以下になった。

彼はいくつかの新製品を「突貫工事」で開発した。しかし、いままでの約束手形を落としていくのに加えて、新事業展開のための費用がかさんでいった。金融機関は、長期は勿論当座の運転資金の貸し付けまでを渋り始めた。

新事業についてのいくつかの良き反応を得たとき、富田は増資することで資金を調達することを考えた。事情を説明し増資引き受けをお願いして回った。大方の友人は、これを断り彼から遠ざかっていったが、数人の友人は増資を引き受けてくれた。

富田は、新製品を軌道に乗せるべく死にもぐるいで働いた。しかし、新製品の新しい市場開拓と新しい流通への浸透は予想以上に時間がかかった。富田は、7割方の人員を整理して、新規事業のみに必要な最小限度の体制にした。この時、増資して、1年目であった。2年目も赤字であった。

この2年目の決算終了後、赤字の報告とこれからの展望について、一人でキリ

キリ舞いの忙しい中にもかかわらず、出資に応じてくれた友人一人一人を訪ねて説明した。その内の二人からは株を買い取ってほしいと言う話が出たという。

このとき、岡田は、何かすつきりしない気持ちを持った。増資の引き受けを断るのは致し方ないとしても、事情を知り、潰れるかもしれないことを承知で出資した以上、もはや出資金は返つて来ないと思うことが当たり前と思っていただけに何かやるせない気持ちであった。

事業がうまくいっているときだけが友達か

このモヤモヤした気持ちを誰かにぶつけようと思ったとき、頭に浮かんだのは不思議にも大学時代からの二人の友人であった。岡田は福田と富岡に久しぶりに飲まないかと電話した。福田はもう定年前で仕事らしい仕事は何もしていないからいつでも来いよと言う返事だった。富岡は、何回やってもきりのない人員整理の忙しさの中にいた。今回の人員整理で俺も一緒に整理し田舎に帰ろうと考えているが、帰る前に会おうかと言う。それぞれ日を約束して会うことにした。色々話した。富田の事件についてそれぞれの話を聞いた。二人とも同じように、「友達達というものは互いにうまく行っているときだけのものだよ」と平気な顔をして言った。おまけに「こんなことで深刻に悩んでいるお前はお人好しだよ。」とも

言った。さらに、「本当に友達になりたいならビジネス抜きにするか、金を貸すのであれば、あげたつもりになれなくてはだめだ。」とさえ言われた。別々に会ったにもかかわらず、二人の話が同じだったことに岡田は自分の感傷めいた気持ちをぶち破られたように感じた。二人の言ったことが当たり前で、富田から離れていった人々が特別悪いことをしたのではないと岡田は自分に言い聞かせることが出来るようになった。

異業種交流会への想い

設立時の自分の想い入れもあって、岡田はこの例会には皆勤で出席している。この会合はオープンマインドを大切にしている。

メンバーではないこともあって、岡田は、この会合では富田の救済については何も話さなかった。しかし、本当の気持ちはこの会合で話したとしても何ら答えが返ってこないことを岡田自身が予測していたからであった。この会合ですら本当の意味で友達の集団にはなりえないという、どうしようもない苦々しさが岡田にはあった。そして自分が友達付き合いすることを求めれば求めるほど、自分を惨めにする事が多くなる恐ろしさを抱くようになりかけていた。

特に不景気が続いている中で、皆自分の事業に生死をかけており、他人の事業を手伝ったり相談に乗るほどの余裕はない。お互いに参考にはするが、自分の事業にプラスになることにしか関心を示さないし行動もしないのが常であって、このような状況の中では、富田の話は皆にとっては迷惑千万でしかない。富田事件も皆にとっては自分達がそうならないような教訓でしかないのだと思うようになった。

岡田は大学時代からの友達である二人との話の後からは、この交流会のメンバーがこのような態度や考えにあるのも致し方ないのだという受け止め方が出来るようになった。

いまはこのような状況の中にあり心から付き合い合える関係にはなりづらいが、この会合の中からもいつかは本当に心から付き合い合いの出来る友になる人が出てくることを楽しみにして、今後この会合に出て来ようと思った。そして、友人を保持する自分になるためには、まずは求めず求められる自分になることだとも思った。また、裏切られるようなことがあっても憎まず人を信頼出来る自分になることも友人を保持するようになるためには肝要だとも思った。